2018 年度後期　授業改善アンケート集計結果に対する意見
―法学部―

法学部長　　山本　輝之

授業評価の結果から何をどのように読み取り分析して、自己の授業における課題を発見し、今後の授業改善につなげていくかは、個々の教員の判断に委ねられていることは言うまでもない。

そのうえで、全体的な結果を見ると、「授業中、この授業の内容を理解するために努力した（ノートをとる等)」という項目の平均値が、今年度前期（以下、「前期」）と同様に 3 点台（前期は 3.92 点、後期は 3.94 点）に止まっている。また、「この授業のレベルはあなたにとって適切であった」という項目の平均値が、前期よりも下がっている（前期は 4.01 点、後期は 3.95 点)。さらに、「この授業は総合的に判断して自分にとって有意義だった」という項目の平均値も、若干ではあるが下降傾向にある（前期は 4.13 点、後期は 4.10 点）ことも気になるところである。

これらの数値から推測できることは、教員は、高度な科目内容を分かりやすく伝え、学生の興味を引くよう話題を提供するなど様々な工夫・努力をされているが、それが必ずしも学生の、授業の内容を理解するための努力を引き出すまでには繋がっておらず、そのため、授業のレベルに追いつくことができず、授業内容を自分にとって有意義と感じることができない学生が若干程度いる、ということではないかと思われる。

大学は、本来学生が主体的に「自ら学ぶ」ことを前提としており、教員ができることは限られているが、教員の側でも以上のことを再度意識し、引き続き、学生の自ら主体的に学ぶ努力をより一層引き出すべく力を尽くしていく所存である。

以上